

# メソジストの信仰に生きる

——ジョン・ウェスレーの信仰思想(20)——

深 町 正 信

## 1. ジョン・ウェスレーの信仰理解をめぐって

ジョン・ウェスレーの信仰について考えてみたいと思います。まずウェスレーと新約聖書の使徒パウロの信仰とを比較して考えてみたいと思います。パウロはイエスをキリストと信じ、罪の赦しの洗礼を受け、そして、聖霊の働きによって歩むものには、罪と死の支配のもとにある生活と縁を切り、古い自分から新しい自分へと転換すると言っています。しかし、パウロは決して「キリストを信じるその人が全く罪を犯さなくなる」とは考えていませんでした。ここで重要なことは、キリストを信じるときに、罪と死の奴隷としての生活から解放され、新しい自分へと変革され、聖霊の働きにより新しい人として歩むものになるのだと言っていることです。

ところが、宗教改革者のマルチン・ルターは「義人にして、同時に罪人である」という考え方をしています。私たちがキリスト者になることにより、罪と縁を全く切るという生活が始まるのではなく、罪人であるが、同時に、信仰により義人でもあると人間を理解しました。

では、ジョン・ウェスレーは人間をどのように理解したのでしょうか。彼はどちらかといえば、宗教改革者ルターの理解よりも、使徒パウロの人間理解に近かったように思われます。ここにこそ実はジョン・ウェスレーの信仰理解の特徴が見られるように思います。

ウェスレーの主張した「キリスト者の完全の教理」に見られるように、人間はどのような過去を持ち、現在善いことが何一つできず、将来も全く善いことを実行する自信がなくても、信仰によって、恵みによって救われるという義認信仰を前提としつつ、むしろ彼は信仰によって、聖霊の働きによって聖化される神の恵みの賜物を熱心に求めることを強調しています。しかも、この「キリスト者の完全の教理」は信仰により、聖霊の働きによって、今この地上で瞬間的に実現するとしています。つまり、ウェスレーは私たちに信仰による義認の賜物にとどまらず、聖霊の働きによる聖化の賜物を熱心に求めることを強く求めているのです。私たちは多くの場合、人は信仰により義とされ、神の恵みにより救われる、第一の神の賜物で満足してしまっていますが、更に信仰により、聖霊の働きにより聖化される第二の神の賜物を求めることをなおざりにしていないか、ということです。

ウェスレーが熱心に勧めている「キリスト者の完全」とは、決して「キリストを信じるその人が一切罪を犯さなくなる」という意味ではないのです。それは絶対に、この地上で達成することは不可能であると考えています。私たちの多くは罪の赦しの徴である洗礼を受けた後も、人間は依然として罪人ですが、なお信仰により罪を赦されているのがキリスト者であると彼は理解しています。

ウェスレーは「キリスト者の完全」ということを決して sinless、つまり、その人の罪が全くなくなるということではないとしています。私たち人間は、聖霊の働きにより一挙に全ての罪から潔められるのではなく、依然として罪人として罪を犯す可能性のある存在ではありますが、もはや罪の奴隷ではなく、聖霊の支配のもとに移され、新たな人として全き愛による完全に至ることができるのだと理解しているのです。

要するにジョン・ウェスレーによれば、私たち人間はこの地上にある限り、無意識の罪からは絶対に免れ得ないということです。しかし私たちは、信仰により、聖霊の働きによって、意識的には罪を犯さなくなるということです。私たちがイエス・キリストを愛するとき、私たち人間は無意識の罪から免れない

のですが、絶対に意識的に罪を犯さなくなると考えたわけです。

私たちは、この信仰による聖化の恵み、聖霊による自己改革（新しくされること）を、終末においてでなく今この地上で、神の恵みとして与えられるというメソジスト教会の信仰の伝統を思い起こし、毎日の信仰生活の中でこの第二の神の恵みの賜物を熱心に祈り、求めていきたいと思います。

カトリック教会は、この聖化を修道院の中で求めますが、ウェスレーはこの世俗社会のただ中で、神の恵みの賜物としての潔めを求めることを勧めているのです。

遠藤周作は彼の著書『聖書の中の女性たち』の中で、自分が聖書の中で最も心を惹かれるのはマグダラのマリアであると記しています。その理由は、「彼女が姦淫の女から聖なる女に変えられたように、キリストを信じるとき、罪深い自分も聖なる人間に変えられる希望を与えてくれるからである」と書いています。この意味で、聖化は遠藤周作にとっても大きな信仰の課題であり、祈りであったと言えると思います。

更に、彼の友人であり『魔性と聖性』等を書いた矢代静一の追究したテーマが、やはり「聖への憧憬」であったことも忘れてはならないと思います。

聖書のコリントの信徒への手紙一第6章11節に「しかし、主イエス・キリストの名とわたしたちの神の霊によって洗われ、聖なる者とされ、義とされています」と記されていますが、ジョン・ウェスレーはこの聖書のリアリティーを信じていたのです。ウェスレーの教会史上、また教理史上において果たした功績は色々ありますが、それは信仰による義認に基づきつつ、信仰による聖化を説いた点であります。個人の聖化だけでなく、社会の聖化をも祈り求めるのがメソジスト教会の信仰であります。従ってメソジスト教会の先輩である方々は、社会福祉や様々な社会事業にも熱心に奉仕してきたのです。私たちはこのメソジスト教会の信仰の遺産を正しく継承し、今後もお互いに信仰生活の中で大いに潔めのために働いていくことが大事な使命であろうと思います。

さらにウェスレーは、私たちが信仰により義とされ、そして信仰により聖化されることも、それらに先立って「先行の恩寵」の働きによると考えています。

彼によれば、私たちの救いはまず神の先行の恩寵の働きにより、悔い改め、信仰、新生、義認へと導かれ、そして信仰による聖化、栄化、全き救いをもって終わる救いの過程として理解しています。これはウェスレーの信仰理解にとって、非常に重要な概念です。先行の恩寵とは、全ての人の中に、全ての人のために働く神の恵みの働きです。彼は先行の恩寵を主張することにより、私たちの救いの条件である信仰さえも、先行の恩寵の働きによることを主張しているのです。つまり、彼がこの先行の恩寵の働きを主張することにより、私たち人間の救いにおける神の恵みの徹底を伝えているのです。

## 2. 聖霊の人、赤沢元造監督について

鮫島盛隆著の『赤沢元造伝』という書物が1974（昭和49）年、赤沢元造伝刊行会から出ています。私は赤沢先生と直接お会いする機会がありませんでしたが、私の両親はそれぞれ先生を大変に尊敬していました。特に私の母は赤沢先生に直接お目にかかり、先生の霊的な敬虔なふるまい、聖徒としての姿にとても感銘を受けていました。私はかつて古田十郎先生の夫人、古田直枝さんが経堂緑岡教会の会員であったので、親しくさせていただきました。この婦人が赤沢元造監督のお子様であって、とても静かな婦人で、主日礼拝が終わると、帰りに会堂の入口で静かに目礼し、ありがとうございましたと言礼を言って帰られる姿を今でも懐かしく思い出します。赤沢監督の訳されたジョン・ウェスレーの『基督者の完全』という本があります。この本は、赤沢先生の信仰による聖化を求める潔めの信仰なくしては、決して翻訳することができなかった名訳であると思います。

先生は1936（昭和11）年に62歳で地上の生活を終え天に召されましたが、実はその年に私が生まれました。1936年5月12日に、赤沢元造先生は愛する妻と2女1男を残して召天されました。その後しばらくして赤沢元造先生の追悼文がつくられましたが、その中で賀川豊彦先生はご自分の文章を「日本メソジスト教会の赤沢元造監督の死は、聖者の殉教であると言われている。それは彼が聖霊に導かれる生活をした聖者であったからである」と結んでおられます。赤

沢先生は「その当時の日本の教会の多くの指導者の間で『聖潔の人』と呼ばれるべき人であったからである」とも言われています。「彼はあくまでも神学者でなく、教会政治家でもなく、聖霊の働きにより潔めに生きようとした一宗教家であったからだ」と言って、赤沢元造監督の死を心から嘆いています。

先生は関西学院神学部のご出身でしたが、ある年に青山学院神学部の卒業式で、卒業していく若き伝道者のために説教をされました。その説教の題が「聖は力である」というものでしたが、その聖い力とはまさに赤沢監督そのものであると、そこに出席していた者たちが一様に感じたということでもあります。つまり、ジョン・ウェスレーが「キリスト者の完全の教理」の中で求めることを勧めている信仰による聖化、聖霊の働きによって潔められる聖潔な歩みは、当時の日本メソジスト教会の指導者であった赤沢元造先生の人格と生活、伝道者としての歩みの中に生き生きと具体化して証しされていたということです。聖霊が先生の信仰生活に豊かに働いていて、永遠の生命が時間の中にすでに芽生え、信仰による完全に向かって成長していたということです。この聖霊体験こそが今日、メソジスト教会の信仰の継承者として、私たちが日本基督教団の共同、つまり一つの真実な教会の形成のために、その特色を発揮すべき信仰の遺産であると思います。

更に、赤沢先生の説教はとても霊的であり、直接聞く者の魂に強く訴えるものがあったということです。先生が講壇の上に立たれると、先生の右に必ずキリストがともにお立ちになり、先生はそれをはっきりと感じ取りながら、そのキリストに励まされて説教をされたということです。ある時期、先生はそのキリストがどこか遠くへ行ってしまったように感じ、そのことをふと夫人に話されたということです。すると、夫人はなんとしてでももう一度生けるキリストをご自分に取り戻されますようにと夫を励ますとともに、家にある金なるものを直ちに売り払って費用を捻出し、生きたキリストを取り戻すまでは帰らないでくださいと言って、夫のために祈って送り出されたということです。

その後大分時が過ぎて、大友牧師が赤沢監督を訪ねたときのことを興味深く書いています。「ある日のことです。私がいつものように赤沢先生のお部屋へ

行きますと、床柱の方に座布団が敷いてあって、先生は卓を隔て、それと向き合って、座って居られました。私はこれでも客人ですから、敷いてある座布団に座ろうとしましたら、先生は私を制せられました。不思議に思っていますと、先生はこう言われました。『そこはキリストの御座です。私は生けるキリストを取り戻すために祈り続けましたが、近ごろやっと生けるキリストが私に近づいてくださいました。あともう少しです。』これを聞いて、私は驚きました。非常に崇高なものに打ちのめされたと言っても言いますか、わたしははじめて聖霊の働く世界というものを垣間見た思いでした。それ以来、大友牧師は赤沢監督に対する思いが一変したと書いていました。それを機会に大友牧師自身、伝道者として聖霊の働きを求めて祈りを欠かすことが無かったということです。

このようにして赤沢先生は再び生けるキリストに出会われ、説教のスランプから脱せられたということです。そして日本メソジスト教会の監督として、教会の責任を全て背負われ、日夜、主と教会と教職と信徒のために尽くされたのでした。ある時、一人の信徒が先生に「先生は教会の全ての重荷を背負われているので、夜もお眠りになれないことでしょう」と言いました。すると先生は「いや、よく眠ります」と答えられました。「でも、それでは無責任ではありませんか」と言うとき先生は「私は床につく前に、主に託された責任すべてを主にお返しして眠りにつくのです。自分で何もできないで、眠っている無意識の時間までご用をお預かりすることはかえって無責任でしょう。そして、翌日再び目が覚めたら、又、主のご用をお預かりして一生懸命に励むのです」と答えられたということです。

この他にも、鵜飼勇牧師が若かったとき、ある朝早く起きて父親の部屋の前を通ると、隙間から父親が熱心に祈っている姿が目に見え込んだということです。ところが祈っている父親の前に座布団が敷かれていたので、不思議に思い後で尋ねると、そこにキリストが来て、座って自分の祈りを聞いていただきためであるという答えであったそうです。そこには生き生きとした聖霊の働きを求めて、そして教会員のため、教会のため、国のため、世界のために毎日祈り働いたメソジスト教会の先輩たちの尊い姿が示されていると思うので

す。

又、青山学院に42年間宣教師として働かれ、今は米国に帰国し引退生活を送っているキッチン先生が、最後の挨拶で次のようにお話してくださいました。「私が日本へ宣教師として派遣されてきて、まず、先輩の宣教師エッケル先生の研究室を訪ね、挨拶をした。そして自分の宣教師としてしようと考えている働きを語った。するとエッケル先生が『キッチンさん、まず何をするにも祈って、神のお導きをいただいて、それから始めましょう』と諭されました。それ以来私は研究室に入ると、まず聖書を開いて、そして神に祈ることを、大学紛争の最中にも一日たりとも欠かさずにしてきました」と証しされました。

日本メソジスト教会の歴史には特筆すべき二つの運動がありましたが、その一つは明治中期に起こった信仰のリバイバル運動であり、もう一つは大正末期に行われた「大成運動」であります。この二つの日本メソジスト教会の出来事は、日本のキリスト教伝道史上において、永く記念されるべき事柄であったと思います。この二つの信仰運動は、いずれも人間の知恵や努力によるものでなく、日本メソジスト教会の教職・信徒が心をひとつにして祈りと聖霊の助けにより起こされた信仰の出来事でありました。まず第一の信仰のリバイバル運動は、何よりも祈祷の精神を篤くすることに全力を注がれました。早天祈祷会が各教会に常設され、そこで教会員のために熱心に祈り、お互いに訪問し合い、積極的に街頭での巡回伝道、野外伝道を始めました。その結果、純真な聖書の福音的信仰が、あらゆる教会への妨害や様々な困難を乗り越えて、力強く宣べ伝えられ、そして日本のキリスト教全体の進展に大きく貢献したのです。

次に、日本メソジスト教会による「大成運動」ですが、これは日本メソジスト教会の鎌倉大会での祈りが導火線となって、日本のキリスト教の伝道の強化、教会の自立、信仰生活の聖化を目的として全教会が一致協力して、献身、献財を誓い、僅か4年間の運動で60万円の献金予定額をはるかに突破する成績を得ることができました。この額は現在の貨幣価値に換算すると約60億円であり、それを僅か7千人位の人々でこの成果を挙げることができたことは、多くの人々の祈りと献身的奉仕によるものであったと言わざるを得ません。

赤沢元造監督の霊的な「大宣言」、その副題は「現代に対する人の使命と責任」という監督の告示が、第8回日本メソジスト教会総会に際して公にされました。そこにはその当時の日本の社会の現状を憂いて、日本メソジスト教会のなすべき第一の使命と責任としては、神の子としての人格の建設運動にあることを提唱しています。キリスト者の使命は神の国の建設であるが、私たちメソジスト信仰に生きる教徒はまず神の生命を生き生きと体験することである。そのために、私たちの第一の使命は、人格建設を第一とする信仰による倫理運動であると訴えています。

日本メソジスト教会のなすべき第二の使命と責任は、信仰と愛との建設運動を進めることであると提唱しています。私たちキリスト者の使命は、不安と失望、愛に飢えている人々に、キリストの信仰と愛を基とした平和の社会を作ること、具体的には愛による相互扶助機関の設置にあると訴えています。このために私たちは日本メソジスト教会を挙げて「大救霊運動」を全国に積極的に進めることとしています。

日本メソジスト教会の第三の使命と責任は、このような危機的な時にこそ、私たちが全国にある主の体なる教会の拡充運動に努めるべきであるとし、教職と信徒とが協力し合い、そして教会の働きである礼拝、伝道、奉仕、祈り、学び、交わりを深めつつ、真実な教会の形成に努めることであると提唱しています。

### 3. 更新運動について

この「大宣言」の後、赤沢元造監督は第8回日本メソジスト教会総会において「更新運動」の実施を呼びかけ、提唱しました。彼はジョン・ウェスレーが英国のアルダスゲートで福音的回心をして、「わが心、聖霊により、燃やされたり」というその霊的体験を、私たちメソジスト教徒も、内に教会の信仰体験を確立し、外に聖霊による人格の更新の福音を高調する一大伝道運動を振起すべき絶好の機会であることを確信し、この運動を「更新運動」と称すると宣言しました。私たちメソジスト教会は創始者ジョン・ウェスレーが1735年、聖霊



の働きにより福音的回心をなし、新しい人として更新したことを記念し、その精進を復興し、特別大伝道を実行するものであると訴え、又私たちは時局を顧みて平和の精進を鼓舞し、公平と正義とを実現することを期するものであると熱心に提唱しました。このために、日本メソジスト教会の教職と信徒4万3千人が協力し、希望を新たにして奮起することを期待すると訴えています。言い換えますと、ジョン・ウェスレーが聖書に基づいて体験した聖霊による更新を、全国にある教会、教職と信徒一人ひとりに経験させ、ジョン・ウェスレーによるメソジスト信仰復興運動により、18世紀の英国が危機から救われたように、今この愛する祖国、日本の救いに貢献しようという内容の監督のメッセージがありました。

赤沢元造監督は、聖書の言葉に生きようとした人であり、又キリスト者が完全に至る道はただ聖霊の力による他なく、したがって聖霊の働きを祈り、求めて、自分の罪の潔めにあずかろうと自ら生きた霊的な人でありました。

渡辺春英氏が「赤沢監督をしのびつつ」という文章の中で、日本メソジスト教会の歴代監督の印象を「第一代の本多庸一監督は円満具足の大人物であり、第二代の平岩愼保監督は理の人であり、第三代の鶴崎監督は情の人であり、第四代の赤沢監督は祈祷の人であり、聖霊の人であった」と述べています。確かにそれぞれが卓越した賜物と、指導者としての資質を持っておられましたが、ある意味で赤沢元造監督の代で、日本メソジスト教会では初めて本格的な霊的指導者を得たとしています。この霊的品性こそが日本メソジスト教会の信仰による遺産であり、教会の宝であると思います。

現在の混沌とした世界の状況の中で、私たちはジョン・ウェスレーの信仰の遺産を継承する者として、公同、つまり唯一の真実な教会を形成するために合同教会である日本基督教団の中で、信仰による義認の恵みのみでなく、信仰による聖化の恵みを与えられるように祈り、聖霊の豊かな働きにより、霊の人として、新しい人として、主と教会と隣人とに熱心に仕えるものとされたいと心から願うものであります。

ジョン・ウェスレーは「メソジスト教徒の特質」と題する文章を書いています

す。それによれば、メソジスト教徒は1. 聖書のみ生きる、聖書を信仰と生活の基準とする一書の人として歩むものであります。2. キリストの心を心として歩むものであります。3. 聖霊の働きによる救いと新生を証して歩むものであります。4. 祈って、聖霊の働きを受けて歩むものであります。5. キリストの福音をあらゆる機会に証しする者、福音を伝道して歩むものであります、と語っていますが、私たちはあらためてウェスレーの言葉を心に留めて歩みたいと思います。

私たちはあらためて日本メソジスト教会の信仰の継承者として、祈って、聖霊の働きを受けて、神の栄光を現し、キリストの福音を前進させ、教会の徳を高め、神の恵みを一人でも多くの人とともに受ける確かな生き生きとした信仰の歩みをお互いに祈り、励ましあって力強くなしてまいりたいと心から願います。皆様一人ひとりの上に、主の豊かな恵みを心からお祈り申し上げて、私の講演を終らせていただきます。

(これは2004年8月、例年の如く青山学院で開催された更新伝道会大会での講演の一部です。)

---

なお、前号の『紀要』(19)に掲載されたジョージ・ギッシュ先生への「感謝の辞」(5ページ)のうち、ご経歴に触れた部分をつぎのとおり訂正させていただきます。

〈正〉「米国のフレンド大学、カンザス州立大学、ミシガン大学大学院、ギャレット神学校を経て、フランシスカン日本語学校、並びに上智大学で日本語と日本文学を学ばれたギッシュ先生は……」

(深町 正信)